

# アレクサンダー・カルダー 《モンスター》

アレクサンダー・カルダー (1898-1976)  
《モンスター》

1948年頃  
金属板・針金 着色  
130.0×235.0×121.0cm  
平成26年度購入  
©2014 Calder Foundation, New York /  
Artists Rights Society(ARS), New York  
撮影：大谷一郎



画工作の授業で「モビール」を作ったことはありませんか？厚紙を切り抜いて魚や鳥などを作り、糸と割り箸の先に吊り下げる、あれです。このモビールを創始したのが、アメリカの彫刻家、アレクサンダー・カルダーです。

ニューヨークで美術を学んだ後、一九二六年、パリに渡ったカルダーは、針金で作った曲芸師や動物を使って自ら演ずる「カルダーのサーカス」で芸術家仲間の人気者となりました。三〇年、オランダの画家、ピエト・モンドリアンのアトリエを訪れたカルダーは、構図研究のため壁に鋲留めされた幾何学形態を見て、「これが動いたらどうだろう」と思いつきました。針金製の動くオブジェ作りと、幾何学形態を立体的に動かすこと、これらの経験とアイデアが合体して、いよいよ三二年、動く彫刻、モビールが誕生します。

カルダーのモビールには様々な種類があります。天井から吊り下げるタイプと、床に置くタイプ。また、天体や電子の運動を思わせる抽象度の高いものと、ネズミ、ヘビ、鳥など具体的なモデルの姿や動きがわかるもの。

《モンスター》と名づけられたこの作品は、三本脚で体を支える床置きタイプです。首から吊り下げられた横棒の左右には、片方に円盤、片方に黒い三角形と色とりどりの小さな鉄片が取り付けられ、

これらのバランスの変化によってゆらゆらとした動きが生じます。

モビールにはまた、電気仕掛けによって多くの鉄片が華麗に回転するモーター・モビールと呼ばれるものもあります。しかしこの《モンスター》の動きはいたってのんびりムード。ネズミやヘビと違ってモンスターは実在しませんから、この作品の場合、元のモデルがどんな動きをする生き物なのかはわかりません。でもきっと、もそもそしたあまり機敏ではない類いのモンスターなのでしょう。具体的なモデルが実在しない、という意味では、この作品は抽象度の高いタイプとも言えますが、しかし展示してみると、やはりギャラリーの片隅に不思議な生き物を一匹飼っているような気分になります。それはこの作品が、通常の美術作品とは異なり、やはり動くゆえなのでしょう。単純なことですが、ほんの小さな動きでも、動きは本来生命のない事物に生命感を与える大きな力を持っている。まさにこの点こそが、カルダーを生涯モビールに惹き付けたのです。

この作品は、当館が二〇一〇年より収蔵を進めてきた「盛田良子コレクション」の中の一点です。ギャラリーで見かけた際には、ついついエサなどやらないようご注意を！何だか干し草でも食べたそうな気配を漂わせていますので。

(美術課長 蔵屋美香)